

[報告] 会員からのコメント

「アトリプシー／ART+3C わたしたちでつくる、ケアとアートのしくみ:アートをを用いた自己表現とケアを生みだすコミュニケーションデザインの実践的考察」へのコメント

森 合音(四国こどもとおとなの医療センターアートディレクター／NPOアーツプロジェクト理事長)

自身が「アートによってケアされた」ことと、誰かを「アートによってケアする」ことには近いようでいて遠い隔たりがあります。榎原氏はその間をつなごうと、自己の内側に起こることと外側で起こること、その間を行き来しつつケアとアートの関係性を探り、懸命に橋をかけようとしている。そう感じた報告でした。

榎原氏は自身の癌闘病をきっかけに経済的、身体的、精神的悩みを抱え、社会的孤立を感じるようになります。そんな過酷な日々の中で、自身が癌を発症することでヤングケアラーになってしまった娘と、楽しみで始めたアルコールインクアートによって自分自身の内なるケアだけでなく娘との間にもケアが生まれたことを実感します。(この時の心情を綴ったエッセイは2024年のアートミーツケアジャーナルに掲載されています)榎原氏は自身がアートによってケアされたことで満足することなく、次の行動に移ります。「自身にとってケアであったアートが誰かをケアする可能性があるのではないか」という仮説を立てたのです。これは意識的にせよ無意識的にせよ、多くの表現者が作品を発表し始める動機となるものだと思えます。ただ、発表してみるとすぐに、とても近い場所にあったはずの両者の間には簡単に超えられない境界があることに気づきます。そしてともすればそこを分岐点として、どちらか一方、つまり芸術家かケア従事者の道を歩み始め、これもまた意識的にせよ、無意識的にせよその狭間で「専門用語」の介入によって両者は分断され細分化されいつの間にか生まれた一見物分かりのいい無関心、もしくは棲み分けという境界によって共通の言葉をなくし互いに語ることを諦めてしまいます。今回の報告で榎原氏が見ようとしているのはまさにその狭間を通い合う、元々は繋がっていたはずのまだ名前のない柔らかかでおおらかなエネルギー循環のように思えます。自身にとって遊びの中の自己表現こそがケアであったという実感を感じ、癌患者の尊厳や存在意義に通じるスピリチュアリティ(精神性)のサポートという視点から事業(実践)と調査(研究)をはじめ、作品発表の場を模索し作品を販売しその過程で起こる自身の心境の変化について分析を重ねています。そして独自のWSを考案し、オリジナルプロダクトを制作します。榎原氏は既存の様々なケアの手法を学びつつ、WSを実践しながら、体験者に起こった変化を丁寧に考察し、セルフ・コンパッション尺度を用いてアンケート調査を実施、これまで捉えきれなかった心の動きを見える化しようとしています。「アートには癌患者のケアをなし得る可能性がある」という彼女の直感へ向かうために、その道筋を科学的に分析しようと試みています。

榎原氏はこれからも実践で得た実感と、分析で得た理論から次の仮説を立て挑戦し続けるでしょう。その時、実践は次の研究に含まれ、研究は次の実践に含まれる。含みつつ含まれる相互の流れが生み出されていくようにも思われます。その原動力は人がよりよく生きるために生まれた

ケアとアートに橋をかけ、自己と他者の生命を共に活性化させようとする情熱であり、まだ見ぬ新たな表現を模索する切実な姿勢は、まさにアートミーツケア学会が目指そうとするものだと思います。